（　和　歌　山　県　）

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

| 学校名 | 金屋町立鳥屋城小学校 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　年 | １　年 | ２　年 | ３　年 | ４　年 | ５　年 | ６　年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | ２ | ２ | ２ | １ | ２ | ２ | １ | １２ | １８ |
| 児童数 | ４５ | ４３ | ４６ | ３６ | ４５ | ４３ | １ | ２５９ | |

Ⅱ　研究の概要

１　研究主題

子どもが“生きる”　学力・授業・評価
――　個を生かし、育てる授業づくり　――

２　研究内容と方法

（１）実施学年・教科

全学年算数（児童の理解度に差が出やすい教科であり、全学年で系統的な指導をするため）

（２）年次ごとの計画

平成14年度

〇テーマ
個を生かし育てるための教師の授業力向上

〇研究の見通し（仮説）
教師の授業力向上によって、個が生かされるとともに、児童の学習への意欲的な取り組みが見られるようになり、学力の向上が図られる。

〇研究内容・方法
「わかる楽しさ、できる喜び」を味わえる授業が、子どもたちの「学びたい」気持ちを育て、結果として学力を向上させると考える。そのためには、「わかる楽しさ、できる喜び」を味わわせる授業が大前提であり、私たち教師自身の力量向上が求められる。そこで下記の点を算数科授業づくりの視点として取り組む。

・問題解決学習の重視
・操作活動の重視
・ノートづくり、ワークシートの活用
・絵や図が描ける子どもの育成
・くり返し指導の重視
・コミュニケーション能力の育成

平成15年度

○テーマ

個を生かし育てるための評価の実施

○研究の見通し（仮説）

個々の子どもの実態を的確に捉え、適切な対応をすることによって、学力ならびに学習意欲の向上が図られるとともに授業改善が進む。

○研究内容・方法

指導と評価は一体的なものである。子どもたちに基礎的・基本的な内容が確実に身に付いているかどうかを適切に評価し、指導や学習の改善に生かしていく必要がある。そこで、学習指導要領の目標に照らして、子どもたちの到達度を客観的に評価するために評価規準を作成するとともに、規準に達し得なかった子どもへの手だても考える。

※昨年度計画にした平成１５年度計画と平成１６年度計画を差し替えた。

平成16年度

○テーマ

個を生かし育てるための授業形態の工夫と教材開発

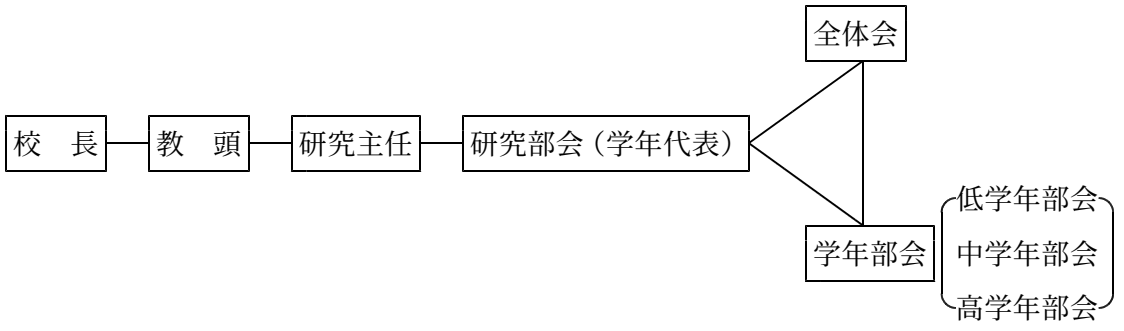
○研究の見通し（仮説）

児童の実態にあった指導形態を工夫し、その教材を開発することによって、個に応じた指導が実施され、学力の向上が図られる。

○研究内容・方法

児童一人一人に確かな学力をつけるために、授業のどの場でどのような学習形態を取り入れることが適切であるかを考えていく必要がある。ティームティーチングやグループに分かれての習熟度別授業・課題別授業、少人数授業等の効果的導入について考える。その時々の学習内容や指導のねらいによって有効な形態を柔軟に考えていきたい。また、指導者が担任の１名であっても、習熟度を意識した学習展開を可能な範囲で実施していきたいと考える。

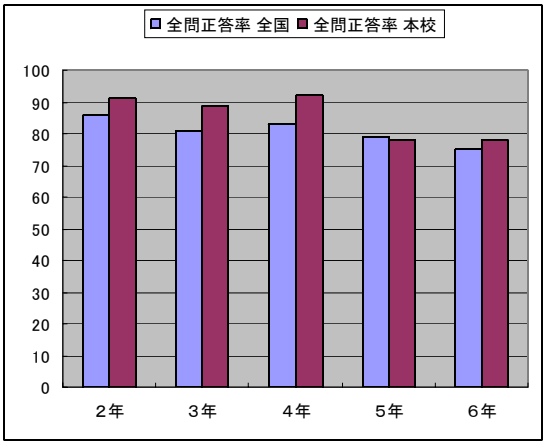
（３）研究推進体制



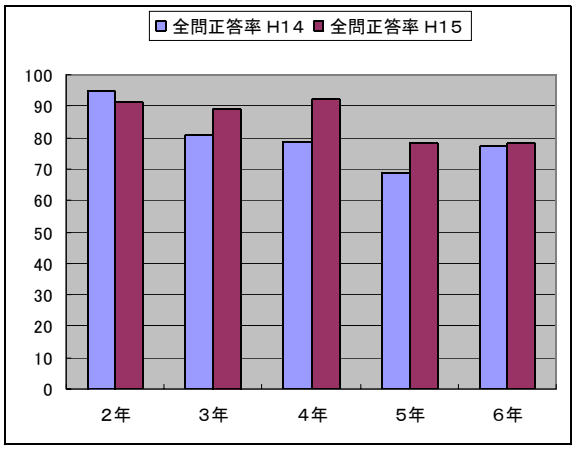
Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

授業で指導したことがどれだけ子どもたちに定着しているか。また、どのような点に優れ、どのような点を苦手としているかを把握するために、昨年度に引き続き算数科についてＣＤＴ（観点別学力到達度診断テスト）を第２学年から第６学年で実施し、分析を行った。その結果、今年度は各学年とも全国平均と同程度かそれを上回る成績であった。（図１）学年の中には全問正答率が９０％を越える学年や、全国平均正答率を１０％近く上回っている学年があり、子どもたちに学力は定着してきていると言える。また、昨年度の結果と比べてみるとどの学年も同程度か、または伸びているという結果である。（図２）これらのことからも、本校の子どもたちの学力は向上してきていると言える。




全国平均との比較（図1）




昨年度との比較（図2）

こういう結果を得られたのは、授業力向上を目指して算数科の授業で問題解決学習を重視し、子どもたち自身が自分の力で問題を解決できるような授業展開を行ってきたことが挙げられる。また、絵や図を描いて自分の考えを整理したり、多様な考えが発表できる授業づくりに取り組んできた成果である。チャレンジタイムを設定して計算力アップに取り組んできた。そのことで、数字への抵抗がなくなるとともに計算技能が高まり、問題を解く力が付いてきたと考えられる。

評価規準を設定して授業での評価と指導を意識し、つまずいている子どもにはその場で指導するようにしてきた。また、授業に愛知教育大学教授志水廣先生の提唱されている「○つけ法」を取り入れ、一人ひとりに寄り添って指導したり、学級担任と加配教員によるＴＴの指導で個に応じた指導を意識してきた。これらのことも、子どもたちの学力が向上してきたことにつながっていると考えている。

２　今後の課題

授業において問題解決学習に取り組んできたが、子どもたちが自力解決できるための課題提示の仕方を工夫したり、練り合いを深める中で数学的思考力を高めるためのコミュニケーション能力の育成に努めなくてはいけない。

また、指導と評価の一体化を目指し、評価規準を生かした授業づくりに取り組んできたが、さらに授業に生かす評価について研究を深めていきたい。

さらに、１６年度の計画にも挙げたが、授業形態の工夫としてＴＴだけでなく少人数指導や習熟度別学習の有効的活用を考えていきたい。そのためには子どもたちの学習実態を十分把握するとともに、それにあった教材の開発に取り組みたいと考える。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

年１回、算数科についてＣＤＴ（観点別学力到達度診断テスト）を実施

調査の目的：継続して調査することによって、本校の児童の学力の状況を把握する。

実 施 内 容：算数科の前年度の学習内容について２学年児童から６学年児童まで実施する。

実 施 時 期：毎年５月

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

フロンティアスクール第２年次研究発表会を開催した。

日　時：平成１５年１２月５日（金）

場　所：本　校

テーマ：「子どもが“生きる”　学力・授業・評価　――個を生かし、育てる授業づくり――」

内　容：算数科研究授業（全学年および特殊学級）

研究概要説明

指導講評

記念講演　講師　愛知教育大学教授　志水　廣先生

演題　「算数科の確かな学力の定着を目指して」

対　象：和歌山県下の各小・中学校教員

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　■７～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　□少人数指導　■Ｔ.Ｔによる指導
□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　■算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無